「蛙の手」錯視

図１　右の写真は左の写真を上下反転させただけのものであるが，指が短くいびつな形の手（『蛙の手』）に見える。

解説　奥行方向に傾斜を付けて撮影した手の写真を上下反転させると，奇妙に指が短くいびつな形の手に見える（図１）。この錯視はおそらく「向こう側に指先が伸びた手」を「上下逆さに見る」という非典型な観察条件下で大きさ恒常性が正常に働かないことに起因する。すなわち，図１右のような角度で手を見ることはほとんどないため，距離によって遠近法的に指の網膜像が短くなっているという推論（大きさスケーリング）が働かず，単に指の短い手と知覚されるのではないだろうか。実際ハサミなどの（体の一部ではない，そ

のために見え方についての自由度が手よりも大きな）物体では錯視がほとんどみられない（図２）。身体像に対して大きさのスケーリングが行われるか否かは身体の可動範囲とそれに紐付いた身体の見えに依存するのかもしれない。

図２　図１同様の条件で撮影した身体以外の物体を上下に反転してもほとんど錯視は生じない。

作者氏名：田谷修一郎
所属：大正大学人間学部人間科学科
連絡先：s_taya@mail.tais.ac.jp